

男声合唱団入門記

渡邊 正明 (平成二十三年四月二十二日記)

リハビリ中の妻が音楽療法に興味をもち、この一年、毎月一回の「童謡を歌う会」に参加している。私も付き添いで一緒に歌っているうちに、皆で歌うことがとても楽しいなと思うようになっていた。

そんな時、たまたま地元のコミュニティ紙の片隅に「男声合唱団員募集」の欄が目にとまった。軽い気持ちで応募してみた。すぐに世話役のSさんから電話が入り、「合唱の経験はありますか」「失礼ですがお歳は」と訊かれた。昔、会社の合唱団で少しばかりハモッテいた経験はあること、来年古希を迎えること、そして、楽譜はほとんど読めないことを伝えた。

「昭和一桁の方も何人かおられますよ」「楽譜は読めなくてもかまいません。耳からも覚えられますよ」「明日夜七時から練習がありますので公民館にきてください」とのSさんの返事。

まずは状況視察とおそろおそろの練習場に行ってみると、Sさんはわたくしの到着を今や遅しと待ちうけていた様子で、間髪をいれず、「バスの一人が急遽入院してしまいましたね」「バスを担当してもらいます」と言いながら、練習中の楽譜を手渡してくれた。

定刻の七時、団員の前で自己紹介。皆についていけないか不安なので、今日は見学だけに来たことを告げた。が、委細かまわず、早速、発声練習に加わるようにとSさんに促された。

指導者は大阪音大出の体格のいいソプラノのM先生とピアノ伴奏は控え目な感じのK先生の紅二点。団員は、テナー四名、セカンドテナー四名、バリトン四名、バス三名の構成。確かに、バスに欠員が出たようだ。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」「い、い、い、い、い、い、い、い、い、い」など、何組かの音階の組み合わせがあつて、これらを低音から高音へ、高音から低音へとくりかえしながら音階を次第に上げ限界かなと思つたとき音階を下げていく。発声練習は、たつぷり十五分も続いた。いつしか、見学であることも忘れて、久し振りに大きな声を出したので気分は爽快だった。

続いて練習曲に移った。「赤とんぼ」、「琵琶湖周航の歌」、「いざ起て戦人よ(ドイツの合唱曲)」の三曲。ところが、ドイツの曲は別として他はメロディーを知っているのですぐに歌えると思つたが、それがまったくダメなのである。バスのパートはさながら別の曲を歌っている感じなのだ。

実は、私は、メキシコとヒューストンに駐在中、在住日本人会主催のカラオケ大会で、いずれも二位入賞の実績もあり、密かに *good singer* を自負していた。が、かかる緊急事態ともなれば、プライドもない。バスを受け持つSさんの隣に座らせてもらい、彼の歌声に聞き耳をたて、忠実について行くしかなかった。

ともかく、何とか初日を乗り切りホッとするのも束の間、Sさんが近寄ってきて「泉州地区での合唱音楽会が一ヶ月後にせまっているので、急いであなたのユニフォームとネクタイを手配しているところですよ」と言いながら、合唱団規約と宣誓書をくれた。

かくして合唱団に合格してしまったのである。

練習は毎週一回だけなので家での自己研鑽が始まった。実はピアノ伴奏でM先生にバスのメロディーを歌ってもらい、テープに録音してきた。何度もこのテープを巻き戻しては聴きながら口ずさむうちに、なんとか歌える自信も出てきた。

泉州地区合唱音楽会には大阪南西部の各地から二十を超える合唱団が参加。思い思いのユニフォームを身に付けて多数の合唱愛好者が皆、一生懸命、声高らかに歌い上げ、素晴らしいハーモニーを披露した。しかし、ほとんどが女声合唱団である。混声合唱団もあつたが男女比からすれば女声合唱団に近い。そして男声合唱団といえば、わが合唱団を含めわずかに二つだけだった。地域のいろいろな活動には圧倒的に女性の参加が多く、元気な女性（大阪のおばちゃん）パワーが横溢しているのを見聞していたが、かくも男女格差があるとは！

いよいよ、白いジャケットにコバルト色のネクタイ姿のわが合唱団の出演となつた。突然、Sさんからアドバイスをもらった。

「わたなべさん、歌えないところは無理に歌わなくても、ロパクで結構ですから」と。内心、大いにプライドを傷つけられる思いがしたが、気を取り戻し舞台上に並んだ。しかし、歌い始めると、他のパートの声に圧倒されてしまい、何小節かは自分のパートを歌えず、「ロパク」を余儀なくされた。自分だけが悦に入って歌うカラオケの独唱と違った合唱の難しさとお深さを思い知らされた。

演奏会後数日して、「バスの低音にしばれました」という評価もあつたと聞き、いささか面映ゆかつたが、演奏の達成感には十分に得られた。

ところで、作曲家の服部公一氏によれば、現在、「高齢者合唱ブーム」だという。その中心は団塊の世代を中心としたシルバーエイジで楽譜アレルギーなど無いという。というのもお母さんたちが子供にピアノを習わせた六十年前のころのレッスンプームがその下地となつていると。

また、合唱は加齢防止に効果的で、読譜で脳を使い、立ちづめの練習はかなりの運動量になる。年を取ると次第に声がかすれ、老人声になるものだが、発声訓練はこの防止にも役立つ。皆で力を合わせて美しいものを作り上げる芸術的達成感もある、と力説している。

まさに、我が意を得たりというところ。私の楽譜アレルギーは癒されそうもないけれど、古希を過ぎても声が出る限り、合唱を続けたいと思っている。



上の写真

泉州地区合唱フェスティバル (06.11.19)

(筆者は後列右端)